

コブセンチュウ、半身萎凋病、斑点病、TMV (Tm-2a)、葉かび病に耐病性がある。

「桃太郎 J」

「ハウス桃太郎」に比べ果実は大玉であるが、花痕部がやや大きく糖度がやや低い。また果実硬度がやや低い。節間はやや長く、低温期の吸肥力がやや強い。萎凋病 (レース 1、2)、半身萎ちょう病、斑点病、TMV (Tm-2a)、ネコブセンチュウ、葉かび病に耐病性がある。

※台木の特性

「ボランチ」

萎ちょう病 (レース 1、2)、根腐萎ちょう病 (J 3)、半身萎ちょう病、ネコブセンチュウ、TMV (Tm-2a) に抵抗性、青枯病、褐色根腐れ病に耐病性がある。

「がんばる根 3 号」

萎ちょう病 (レース 1、2)、根腐萎ちょう病 (J 3)、茎枯病、半身萎ちょう病、ネコブセンチュウ、TMV (Tm-2a) に抵抗性、青枯病、褐色根腐れ病に耐病性がある。

2 育苗

(1) 育苗ハウス

日当たり、風通しが良く、周辺に雑草が無い場所に本圃面積の 15% 程度の育苗面積を確保する。床は均平に鎮圧し、排水対策を行う。次のトマト黄化葉巻病防除対策を徹底する。

(2) トマト黄化葉巻病対策

・開口部に防虫ネットを設置し、コナジラミ成虫の侵入を防ぐ (目合い 0.4mm 以下の防虫ネット被覆は、侵入抑制効果が高いが、施設内が高温になりやすいため、遮光、循環扇および天井散水などの降温対策を講じる必要がある)。

・黄色粘着板・黄色粘着テープを施設内や施設周辺部に設置して、コナジラミ成虫を捕殺する。

・反射マルチ等を圃場周辺部に設置して、コナジラミ成虫の侵入を防止する。

・紫外線カットフィルムを被覆し、コナジラミ成虫の侵入を防止する。

(3) 播種

7 月中旬に播種する。接ぎ木の場合は、呼び接ぎで 2~3 日、幼苗接ぎ木で 1 日早く台木を播種する。種子は 10 a 当たり 40~50 ml 準備し、20 ml を 5~6 箱に条まきする。

水稻育苗箱の場合 20 列×10 粒とし、中央部の徒長を防ぐため列間隔を少し広くする。

幼苗接ぎ木の場合、台木は 72~128 穴のセルトレイに播種する。

(4) 鉢上げ

鉢上げは 10.5~12 cm ポリポットを用い、自根の場合は本葉 1~1.5 枚時に、幼苗接ぎ木の場合は接ぎ木後 1 週間目頃に行い、深植えしないようにする。鉢上げ後 2 日程度日中寒冷紗で遮光し、活着を促す。

ハウス内は散水等を行い降温対策に努める。

(5) 育苗管理

軟弱徒長苗とならないよう、鉢は早めに広げる。灌水は朝行い、夕方に鉢の表面が白く乾く程度の灌水量とし、鉢の乾き具合によって加減する。育苗後期には水不足および肥料切れに注意し、必要に応じ適宜液肥等で追肥する。

(6) 接ぎ木

「呼び接ぎ」

穂木の本葉 2~3 枚時に、子葉もしくは 1 枚目の本葉の上で行う。灌水は接ぎ木前日に行い、接ぎ木後はしおれがなくなるまで 2~3 日間遮光し、10 日程度で自根を切断する。

「幼苗接ぎ木」

接ぎ木までの育苗目標日数を 14 日~18 日とし (本葉 2~3 枚、茎径 1.5 mm~1.7 mm)、子葉上で接ぐ。穂木の茎が細い場合、穂木は子葉の下で切断する。接ぎ木にはシリコンチューブ等の資材を用いる。接ぎ木 5 日程前からは極力乾燥気味に管理し、接ぎ木当日は 2~3 時間前に軽く灌水する。接ぎ木後は遮光資材、冷房、照明、加湿器等を用いた養生施設もしくは養生庫内で 28℃ を目標温度とし、湿度は 90% を目安に 4 日程度萎れさせないよう管理する。養生後は徐々に順化させ、接ぎ木後 1

週間ほどで鉢上げする。

3 本圃の準備

圃場周囲は除草し圃場衛生管理に努めるとともに、暗きよやハウス周りの明きよを設置し、排水対策を実施する。前作で土壌病害の発生が見られた場合は、薬剤による土壌消毒または太陽熱消毒を行う。その後、土壌水分が適切な時に耕起、堆肥等の土壌改良材施用、施肥、畦づくりを行う。地下水位の高いところでは30 cm以上の高畦とする。

畦には白マルチを張るか、土壌水分の多い場合や地温の高い時はマルチを畦の肩まで上げる。

定植直後の黄化葉巻病の感染は減収を招くため、次の物理的防除を実施部分とする。

- ①開口部に防虫ネットを設置し、コナジラミ成虫の侵入を防ぐ。(目合い0.4mm以下の防虫ネット被覆は、侵入抑制効果が高いが、天井ビニルが被覆してあるハウスでは定植後施設内が高温になりやすいため、遮光、循環扇および天井散水などの降温対策を講じる必要がある)。
- ②黄色粘着板・黄色粘着テープを施設内や施設周辺部に設置して、コナジラミ成虫を捕殺する。
- ③反射マルチ等を圃場周辺部に設置して、コナジラミ成虫の侵入を防止する。

(1) 施肥

施肥量 (kg / 10 a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基 肥	1 2	2 0	1 2
追 肥	1 3	0	1 3
全 量	2 5	2 0	2 5

※土壌分析結果や土質により加減する。

(2) 栽植様式

ハウス間口	畦幅	株間	条植	条間	10a 当たり栽植本数
m 6	cm 200	cm 45	条 2	cm 70	本 2,100
8	200	45	2	70	2,100

4 定植

本葉7～8枚展開、1段花房開花前の苗を定植する。定植は早朝か夕方に行い、植え付けは浅植えとする。植えつけ後鉢回りに灌水し、活着を促す。

5 定植後の管理

(1) 交配

ア ホルモン処理

処理は1花房3花開花時に、夏場は2～3日毎、冬場は4～5日毎に成長点部分にかからないよう注意して交配する。重複処理は空洞果や乱形果の原因となる。

処理時期が早すぎると花抜けが悪くなり、灰色かび病の原因となる。処理濃度は高温期には薄く、低温期には濃くし、トマトトーンで100～150倍で行う。なお、草勢が強く空洞果が発生する場合は、ジベレリンを5 ppm 混用する。

イ マルハナバチの利用

セイヨウマルハナバチの利用には使用許可が必要であり、ネット展張などの野外への逃亡防止策を実施する。クロマルハナバチ利用の場合にも同様にネットを展張する。

1段～2段花房は確実に着果させるためにホルモン処理を行う。マルハナバチ1群(1箱)で交配可能な面積は大玉トマトで10a(夏場)～20a(冬場)であり、2ヶ月程度使用できる。マルハナバチ交配の適温は夏場で35℃以下、冬場で昼温25℃以上夜温10℃以上である。巣箱はひざ位の高さに設置し、温度やアリの進入等を考慮し、日除け、水濠を設けるなどの工夫をする。導入は夕方もしくは朝に行い、必ず2～3時間以上ハウスを締め切って学習飛行させる。導入後は花にハチのかみ傷(バイトマーク)が付いているか確認する。導入後4～5日経ってもバイトマークが付かない場合はホルモン処理を行っておき、購入先に相談する。マルハナバチ交配を行う場合は、農薬のハチに対する影響を考慮する。農薬はハチの成虫および幼虫に影響の少ないものを用い、散布の際は安全日数を考慮して規定期間巣箱をハウス外に出しておく。

(2) 誘引、整枝

定植後はなるべく早く誘引し、以後も早めに誘引していく。6～8段どりとし、最上段花房上に1～2葉残して摘心する。

(3) 腋芽の除去、摘葉

腋芽の除去は病害伝染を回避するため晴天の日に、また腋芽が小さいときに実施し、ハサミ等は使わず手で行う。摘葉は収穫果房の下2枚を残して行う。

(4) 摘果

摘果は1、2段花房は3～4果、それ以降は4～5果に摘果する。

(5) 追肥

第1回追肥の時期は草勢をみて調整するが、1段果が500円玉大程度の頃に行い、それ以後は20日間隔を目安として追肥する。10a当たり窒素成分で3kg程度を肩施肥または穴施肥として施す。

(6) ビニル被覆時期と温度管理

ビニル被覆は10月中旬までには終わるようにする。また、台風の襲来が予想されない場合は早めに被覆する。気温は昼間28℃、夜間12℃を目標に管理し、10月下旬には暖房機を準備して、10℃以下の低温にあわせないようにする。

(7) 台風対策

ハウスのテープの締め直し、鋼管、ラセン杭の補強、防風ネットを張るなどの対策を行う。ビニル被覆後で換気扇のあるハウスは回しておく。トマトは誘引を確実にしておく。台風通過後は予防的な薬剤散布を行う。

(8) 灌水

活着までは十分灌水し、活着後は草勢を見ながら実施する。着果後は安定した土壌水分が必要となるため、不足しないよう注意する(1回当たり3mm程度を目安とする)。1～2月の灌水は地温低下を防止するため少量多回数とする。

6 収穫

出荷時期、出荷先を勘案して着色程度を決めて収穫する。